

世界最古のミステリ

—エグロン王「密室」殺人事件を解け！—

山 吉 智 久

世界最古のミステリ —エグロン王「密室」殺人事件を解け!—

山 吉 智 久
Tomohisa YAMAYOSHI

目次

はじめに

1. 「ミステリ」とは
2. 士3:12-30のテキスト
3. 文学的構成
4. 「密室」殺人の様相
おわりに

[Abstract]

The World's Oldest Mystery: Solve the "Locked-Room" Murder Case of King Eglon!

At its core, the text of Judges 3:12-30 tells the story of Ehud's victorious behaviour in the Benjaminite tradition (vs. 15*-26). This old tale does not emphasize the power of the Israelite God YHWH, nor a supernatural miracle. Rather, it focuses on the wisdom and courageous actions of the tribal hero Ehud. The process of him entering the palace of the Moabite king alone, murdering his enemy Eglon and leaving behind himself a locked-room would be regarded as presenting a 'mystery'. Such 'mysteries', several of which are to be found in the book of Judges, show reasons as to why each tradition was formed and transmitted. It was not only to praise heroic characters but also to arouse the curiosity of the reader and entertain the 'riddle'.

はじめに

旧約聖書は、ユダヤ教やキリスト教の信仰の基盤であるだけでなく、今日まで読み継がれてきた人類の古典という側面も併せ持つ。そこでは、人間と自然、男と女、親と子、兄弟姉妹、友情、個人と共同体、本国と外国など、今日のわれわれにも通じる人類普遍の事柄が主題として取り扱われている。また旧約聖書は、さまざまな文書が複雑に絡み合う複合体でもあり、散文と詩文という形式の別にとどまらず、神話、物語文学、法律文書、経済文書、祭祀文書などの多岐に及ぶジャンルの文書が数多く含まれている。

物語文学の1つに位置付けられる『士師記』

は、「申命記史家」と呼び慣わされる者たちによって、各部族の英雄たちについての伝承ないし伝承群が収集され、イスラエルを裁いた「士師」として編集されて現在の形となっているが、そこには今日の「ミステリ」にも通じる物語が随所に散りばめられている。『士師記』に見られるこれら数々の「謎」は、本文書を構成している各物語が形成、伝承された所以が、英雄的な人物を称賛するだけでなく、物語の読者の好奇心を引き起こし、「謎」の解き明かしを楽しませることにあつたのを示していよう。

本稿は、『士師記』3章12-30節のテキスト、その中でも特に、エフドによるモアブ王エグロンの殺害について語る15*-26節の伝承部

キーワード：旧約聖書、『士師記』、エフド、ミステリ（推理・探偵小説）

Key word : Old Testament, Book of Judges, Ehud, Mystery (Detective Story)

分に織り込まれている「ミステリ」の解き明かしを試みてみたい。

1. 「ミステリ」とは

『士師記』3章12-30節の「ミステリ」の読解に入る前に、「ミステリ」という語について、若干の整理をしておこう。われわれがある文章を前にしたときに、そもそも何をもってそれを「ミステリ」と呼び表わすのか、その厳密な定義付けは容易ではない¹⁾。「ミステリ」という言葉そのものは、英語のmysteryに由来する。英語のmysteryは更に、ギリシア語のμυστήριονから派生したものである。

「ミステリ」という語の発端となったギリシア語のμυστήριονは、唇を閉じて不明瞭な音を出す、あるいは口を閉じていることを表す擬声的な語根μυに、祭儀を意味する接尾辞-τηριονが付いた名詞であり、内容を論理的な思考ないし言葉によって言い表すことのできない祭儀を意味する²⁾。日本語では主に、「秘儀」や「密儀」などの訳語があてられる。密儀宗教の入信者が参加するこの儀式は、理性的な認識を超えた、より深い経験水準において神聖な出来事に捉えられ、祭儀の場において神と一体となり、それによって個人の救いを獲得するのである。入信者は、この儀式の内容についての絶対的な沈黙命令が課された。これらの密儀宗教は、入信者以外の外部の者にとっては、そこで何が行われているかが分からないものであった。このような意味を持つギリシア語を語源とする英語のmysteryは、宗教的な「秘儀」ないし「密儀」から転じて、「隠されたもの」、「秘密」、「事情の説明、原因などが不明である事実、問題」といった一般的な意味でも用いられるようになり、そこから更に、「推理・探偵小説」(detective story)を表す語としての用例が確認されるようになる³⁾。

こうした背景の下、「ミステリ」という言

葉は一般に、文学作品の1つのジャンルを表す名称として用いられる。すなわち、「ミステリ」は基本的に「推理・探偵小説」(detective story)のことであり、作品中に何らかの謎が提示され、その謎が作品の中で合理的思考・手段によって解明されてゆくことを主眼としたものを表す⁴⁾。この意味での「ミステリ」の嚆矢はしばしば、アメリカの作家エドガー・アラン・ポーによって1841年に発表された短編小説『モルグ街の殺人』であると言われる⁵⁾。この種の小説では、読者を騙さないフェア・プレイのトリック、遊びとしてのパズルなどが作品の必須条件とされ、ヴァン・ダインによる「ヴァン・ダインの二十則」⁶⁾や、ロナルド・ノックスによる「ノックスの十戒」⁷⁾といった、このフェア・プレイの精神を掲げて、「ミステリ」を制作する際に守るよう推奨する基本指針も登場した。

その一方で、「ミステリ」とは、ある文学作品内に見られる特定の要素のことであり、「謎解き」や「事件」があれば、それを「ミステリ」と見なすことも可能である。この論に立つならば、「ミステリ」の起源は古代にまで遡る。この種の「ミステリ」としてしばしば俎上に載せられるのが、旧約聖書続編の『ダニエル書補遺』に含まれる「スザンナ」と「ベルと竜」である⁸⁾。いずれも『ダニエル書』のギリシア語訳に付された、ダニエルを主人公とした知恵物語である。

「スザンナ」は、ユダヤ人有力者のヨアキムの妻で、美貌と律法の知識に長けたスザンナという名の女性が水浴びをしている姿を、民の中から裁判人に選ばれた2人の長老が覗き見て、情交を迫るが、彼女に抵抗されたのが事の発端である。長老たちはこの事実を隠蔽するため、偽証によって彼女を姦淫の罪で死刑に定めてしまう。このとき、神がダニエルの「聖なる霊」を呼び起こし、ダニエルは進み出て異議を唱え、長老たちを訊問して偽証を暴き、彼女の潔白を証明するのである⁹⁾。

「ベルと竜」は、バビロンにベルという神の像があり、人々の信仰を集めていたという描写で始まる。王もそれを礼拝していたが、側近のダニエルがベルを敬おうとしないのを見て、彼をとがめ、ベルが毎日大量の食物を消費しているのを認めないのかと詰問する。しかしダニエルは、ベルが偶像であって飲食するはずはないと断言し、食物を消費しているのは祭司たちであることを突き止める。彼は食物を供えた夜の内に、床の上に密かに灰をまいておき、祭司たちの足跡が残るように仕掛けておいたのである¹⁰⁾。

旧約聖書の文書の中にも、今日の「ミステリ」に通ずる物語伝承がいくつも収められている。代表的なものとしては、『列王記上』3章にある「ソロモンの裁き」がある（王上3:16-28）。あるときソロモン王の前に、2人の遊女が裁きを求めてやって来る。2人はほぼ時を同じくしてそれぞれ子を産んだが、過ってその内の1人の子が死んでしまう。残った1人の子をめぐる、2人がいずれも自分の子と主張する。これに対して王は、剣を持って来させ、生きた子を2つに切り裂き、争い合う2人にそれぞれ分け与えるよう命じる。すると本当の母親は胸が締め付けられる思いに駆られ、切り裂かずに生かしておくよう懇願したのに対し、偽りの母親は容赦なくその子を切り裂くよう求める。こうして本当の母親が見分けられるのである。ある聡明な裁判官たる王が、賢い処置によって、解決不可能と思われた事案において、真実を突き止める物語である¹¹⁾。

『士師記』にも、数多くの「謎」が仕込まれている。とりわけ13-16章のサムソン物語の中で、ティムナで見つけたペリシテ人の娘との婚礼の席上、サムソンは客人たちに対して、文字通り「謎」(הִידָהּ/*hidah*)を出して彼らを挑発している（士14:12.19）。同じ『士師記』3章12-30節にある「士師」エフドによるモアブ王エグロンの殺害について語る物

語もまた、読者の前に「どのようにやったのか」(ハウダニット, Howdunit = How done it?) という「謎」を提示して知的好奇心を刺激する「ミステリ」の1つとして捉えることができる。

2. 士3:12-30のテキスト

『士師記』3章12-30節の詳しい分析のために、まずはマソラ本文(BHS)の日本語訳テキストを示す。本箇所のマソラ本文には、旧約中に一度しか現れない語(hapax legomena)がいくつも見られ、文意や語意の確定が容易ではない箇所が少なくない(特に22-23節)。本文批評上の問題や文法的、語彙的な説明については、その都度、訳注にて論じる。

翻訳

¹²イスラエルの子らは再び、ヤハウエの目に悪を行った。ヤハウエはモアブ^{a)}の王エグロンを、イスラエルに対して強くした。彼らがヤハウエの目に悪を行ったからである。¹³彼は、自分のもとにアンモンの子ら^{b)}とアマレク^{c)}を集めた。彼は行って、イスラエルを撃った。彼らは、なつめやしの町^{d)}を占領した^{e)}。¹⁴イスラエルの子らは、モアブの王エグロンに18年仕えた。

¹⁵イスラエルの子らは、ヤハウエに叫んだ。ヤハウエは、彼らのために救助者を立てた。ベニヤミン人ゲラ^{f)}の子、左利きの^{g)}人エフドを。イスラエルの子らは、貢ぎ物を彼の手に、モアブの王エグロンのもとに送り出した。¹⁶エフドは、彼のために剣を作っておいた。それには両刃^{h)}があり、その長さは1ゴメドⁱ⁾だった。彼は、それを彼の衣の下、彼の右の太腿^{j)}の上に帯びた。¹⁷彼は、モアブの王エグロンに貢ぎ物を差し出した。エグロンは非常に太った^{k)}人だった。

¹⁸彼が、貢ぎ物を差し出し終えたときのこ

とである。彼は、貢ぎ物を運んでいた民を送り出した。¹⁹そして彼自身は、ギルガル¹⁾近くのペシリム²⁾から引き返した。彼は言った、「王よ、私には、あなたに、内密の言葉があります」。彼は言った、「しっ」³⁾。すると彼のそばに立っていたすべての者たちは、彼のそばから出ていった⁴⁾。²⁰エフドは、彼のもとに入った。彼は、涼みの階上の部屋で座っており、1人きりだった。エフドは言った、「私には、あなたに、神の言葉があります」。すると彼は椅子から立ち上がった。²¹エフドは、彼の左手を伸ばして、彼の右太腿の上から剣を取った。そしてそれを彼の腹に刺した。²²刃⁵⁾の後ろの柄⁶⁾までもが入ってゆき⁷⁾、脂肪が刃の後ろを塞いだ。彼が、剣を彼の腹から抜かなかったからである。糞尿が出てきた⁸⁾。²³エフドは、柱廊⁹⁾へと出てきた。彼は、彼の後ろで階上の部屋の扉を塞ぎ、門をかけておいた。²⁴彼は出てきた。彼の家臣たちは入ってきて、見た。すると見よ、階上の部屋の扉は門がかけられていた。彼らは言った、「ああ、彼は涼しい部屋で足を覆っておられるのだ」。²⁵彼らはひたむきに待った。だが見よ、階上の部屋の扉を開ける者は誰もいなかった。そこで彼らは鍵を取って開けた。すると見よ、彼らの主人は地に倒れて死んでいた。²⁶エフドは、彼らがためらっている間に逃れた。彼はペシリムを通り過ぎ、セイラ¹⁰⁾へと逃れた。

²⁷彼がやって来たときのことである。彼はエフライムの山で角笛を吹き鳴らした。するとイスラエルの子らは彼と共に山から下った。彼が、彼らの前にいた。²⁸彼は言った、「彼らに向かって、私の後について来い。ヤハウエが、お前たちの敵、モアブをお前たちの手に与えたからである」。彼らは、彼の後を下ってゆき、モアブへのヨルダンの渡しを捕った。彼らは誰も渡らせなかった。²⁹彼らはこのとき、モアブをおよそ1万人撃った。すべて肥えた¹¹⁾、そしてすべて勇士だったが、誰も逃

げられなかった。³⁰モアブはこの日、イスラエルの手の下に屈服した。この地は80年にわたって平穏であった。

訳注

^{a)}「モアブ」は、ヨルダン川東岸に居を構えた民族で、その領域はおよそ死海の東側部分に当たり、西は死海、東はステップ地帯によって区切られ、北にはアルノン川＝ワディ・エル・ムジブ(Wādī el-Mūjīb)を境としてアンモンが、そして南にはゼレド川＝ワディ・エル・ヘサ(Wādī el-Ḥesā)を境としてエドムが控えた¹²⁾。

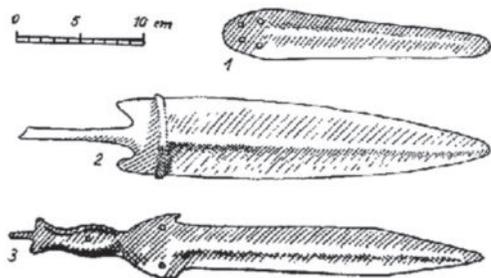
『民数記』22-24章には、カナンの地を目指して侵入してきたイスラエル諸部族に脅威を覚え、バラムにイスラエルを呪詛させようとして挫折したモアブの王バラクが登場する。またイスラエル最初の王サウルも、モアブの王と戦って勝利したといわれる(サム上14:47)。その後のダビデ王の時代、モアブ人はダビデに討たれて隷属し、貢ぎ物を納めるものになったとされる(サム下8:2)。『列王記下』3章では、北王国の王アハブの死後に、モアブの王メシャが反乱を起こしたが、イスラエルの王ヨラムがユダの王ヨシャファトと共に、エドム王の支援を得てエドムのステップを通り、メシャを迎え討つたと記される。

^{b)}「アンモン」は、ヨルダン川東のヤボク川沿いの全域と山地の町々をその領土とした民で(申2:37参照)¹³⁾、旧約聖書に92回(士師記では27回)ほど登場するが、サム上11:11、詩83:8以外は、すべて「子ら」の語を伴う。創19:38では、「アンモン」という名が、「わが民の子」を意味する「ベン・アミ」から説明されている。イスラエルの民との間には、古くから政治的・軍事的に緊張と抗争が繰り返されたと見られ、『士師記』では他に、エフタ(士11:1-12:7)の敵手として登場する。王国時代、サウル(サム上11:1以下)はアンモン人を撃退し、ダビデはこれを支配下に収めたとされる(サム下10:1以下)。

^{c)}「アマレク」は、シナイとパレスチナ南西の間に住んだ民族で、『創世記』36章の系図では、エサウの子孫とされている(創36:12,16)。旧約聖書では49回ほど見られるが、アンモンと並んで登場するのは、本箇所以外には、詩83:8のみ。

- d) 「なつめやしの町」は、士1:16において、ユダの子らと共にユダの荒野、ネゲブのアラドに上っていったモーセの義父ケニ人の子らがかつて滞在した場所として既出。この町は、後代になってエリコと同一視されている（申34:3, 代下28:15¹⁴⁾。元来の「なつめやしの町」は、死海の南南西約10kmに位置するエーン・エル・アルース（'Ēn el-'Arūs）と同定される。
- e) 七十人訳やウルガタなどでは、動詞 יָרַס /yrās の主語は3人称単数形の「彼」であるが（マソラ本文は、3人称複数形の「彼ら」）、この語形はおそらく、直前に出る2つの動詞の語形に合わせたものであると考えられる。
- f) 「ゲラ」(גְּרָא /gērā') の名は、「寄留者」を表す גָּר /gēr に由来するものと見られる¹⁵⁾。この人名は、旧約聖書では本箇所以外、創46:21, サム下16:5, 19:17,19, 王上2:8, 代上8:3,5,7に見られる。いずれの箇所でも、本箇所と同じように、ベニヤミンと関連付けられている。
- g) 字義通りには、「彼の右の手が遮られた」。
- h) 字義通りには、「2つの口」。多くの写本では、数詞の「2」が、女性名詞の「口」に合わせて、女性形の שְׁנַיִם /šēnā'im となっている（レニングラード写本では、男性形の שְׁנַיִם /šēnā'im）。剣の刃を「口」(פֶּה /pēh) とする表現は、創34:26, 出17:13, 申13:16, ヨシユ6:21, 10:28, 士1:8, 4:16 などにも見られる¹⁶⁾。
- i) 「ゴメド」(גֹּמֶד /gōmēd) は、旧約聖書中、本箇所にのみ用いられる長さの単位。七十人訳 (σπιθαμή)¹⁷⁾、ペシッタ (garmidā)、ウルガタ (palmae manus) は、「手尺」(約20cm)。「剣」を意味する חֶרֶב /hæreb には、短剣と長剣の区別はない（図表1参照）¹⁸⁾。

- j) 「太腿」(יָרֵךְ /yārēk) は、他に 出32:27, 詩45:4 などに見られ、剣を帯びる場所とされた。エフドは左利きだったため、剣を帯びたのは右の太腿だった。
- k) 形容詞の「太った」(בָּרִי /bārī') が、特定の人間の形容として用いられるのは、旧約聖書において本箇所のみである。他には、雌牛（創41:4,20）、雄牛（王上5:3）、家畜（エゼ34:3）、羊（エゼ34:20）、穂（創41:5,7）、体（詩73:4）などの修飾に用いられている。
- l) 「ギルガル」は、ヨシユ4:19によれば、「エリコの町の東の境」にある町。エリコから約3km東のヒルベト・エル・メフギル (Hirbet el-Mefgīr) が候補とされる¹⁹⁾。
- m) 「ベシリム」(פְּסִילִים /pēsīlīm) の単数形 פְּסִיל /pēsīl* は、「神像」を意味する（王下17:41, イザ10:10, 42:8, エレ8:19など）。七十人訳では γλυπτῶν 「彫像」²⁰⁾、ウルガタでは idola 「像」。その地にくつもの神像が置かれていたことから、このように呼ばれたか。地名としての用例は、旧約聖書において本箇所のみである。
- n) 「しっ」(חָס /hās) は、沈黙を促す表現で、アモ6:10, ハバ2:20, ゼカ2:17, ネへ8:11などにも見られる。これは、物語の中で、エグロンが発する最初で最後の言葉である。
- o) マソラ本文では、主語が3人称男性複数形の「彼ら」だが、七十人訳、シュンマコス訳では、ἐξαπέστειλεν 「彼は、出ていかせた」と、主語が3人称単数形の使役動詞になっている²¹⁾。
- p) 原語の לָהָב /lahab の基本的な意味は、「炎」（士13:20, イザ29:6, 30:30, ヨエ2:5, ヨブ41:13。アッカド語 la'bu 「炎, 熱」も参照[AHw 526b]）。そこから転じて、剣の「刃」を表す（ナホ3:3, ヨブ39:23参照）。
- q) 語根 נָסַב /nšb 「立てる」からの派生語である נִסְבָּב /niššāb は、旧約聖書中、本箇所のみに見られる語 (hapax legomenon)。語根の基本的な意味ならびに文脈に鑑みて、剣の刃の後ろにある「柄」ないし「持ち手」の部分を指すものと思われる²²⁾。七十人訳では, λαβή 「柄」。
- r) 動詞「入っていった」(בָּוִי /bawī') の主語は、3人称男性単数形であるため、新共同訳や聖書協会共同訳のように、女性名詞の「剣」を主語とするのは文法的に無理がある。試訳では、主語を「柄」と解す（新改訳を参照）²³⁾。
- s) פָּרְשָׁן /parsē dōn* は、旧約聖書中、本箇所のみに見られる語 (hapax legomenon) で、厳密な語義の確定が困難である。アッカド語



1. テル・エルアジュール出土（中期青銅器時代）
2. ゲゼル出土（後期青銅器時代）
3. メギド出土（前900年頃）

図表1 パレスチナ出土の古代の剣

parašdinnu「穴」との類比から²⁴⁾、「小窓」,「抜け穴」²⁵⁾,あるいはפַּרְשָׁה/*paraš* (出29:14, レビ4:11, 8:17, 16:27, 民19:5, マラ2:3を参照)と読み換えて、「汚物」,「糞」と解する者も少なくない²⁶⁾。BHS校訂者は、直後の23節aとの重複(dupliciter)の可能性を示唆している。七十人訳には、この部分に該当する一文を欠く。

M. バレー (Barré) は、これをアッカド語の動詞*naparšudu* (語根*pršd*)から説明しようとする²⁷⁾。「外に出る」を基本的な意味とする*naparšudu*は、医学文書において、「体内から排出されるもの」=「糞尿」と共に用いられることがあることから、פַּרְשָׁה/*paraš dōn**は、語根*pršd*に-(o)nが付け加わって名詞化されたもので、(1)「脱出口」、(2)「肛門」、(3)「糞尿」の可能性を示唆している。バレーは、脱出の経緯は「エフド」が主語として明示される23節から始まるものと考え、これらの内の(3)「糞尿」を表すと解している。マソラ本文には、語尾に方向を表すヘー(He locale)が付いているが、これは本単語の意味が忘れられた後代になって、同じ構文の23節からの類推で付け加わったとする。

¹⁾ פַּרְשָׁה/*paraš rōn**もまた、旧約聖書中、本箇所のみに見られる語(hapax legomenon)で、厳密な語義の確定が難しい。語根סַדַּר/*sdr*「並べる」からの派生語か。

^{u)} 旧約聖書中、本箇所のみに見られる地名で(ヨシュ15:10の「セイル」参照)、位置は不明²⁸⁾。語源的には、שַׁיִר/*šā'ir*「毛深い」(創27:11)ないしはשַׁיִר/*šā'ir*「雄山羊」(創37:31, レビ4:23など)と関連するか。七十人訳では、Σειρωθα「セイロータ」(アレクサンドリア写本)ないし Σειρωθα「セテイロータ」(パチカン写本)。

^{v)} 形容詞のשָׁמֵן/*šāmēn*「肥えた」は、「油」(שֶׁן/*šēn*/*šamēn*)に由来する語。七十人訳(アレクサンドリア写本)では、μαχητής「戦士」²⁹⁾。他の箇所では専ら、動物(サム上15:9, エゼ34:16)、土地(民13:20, エゼ34:14, ネへ9:25.35, 代上4:40)やパン(創49:20, イザ30:23)の形容に用いられる。

3. 文学的構成

『士師記』3章12-30節のテキストは、「士師たち」の活動について述べる3-16章の一連のサイクルにおいて、直前の3章7-11節のオトニエルに続いて³⁰⁾、2人目の「士師」としてのエフドの活動を中心に展開される物語である。その概要は次の通り。イスラエルの子らは、最初の「士師」オトニエルが死んだ後、再び彼らの神ヤハウエから背反する。彼らは、そのために18年にわたってモアブの王エグロンの支配下に置かれた。助けを求めるイスラエルの叫びを聞いたヤハウエは、救助者としてエフドを立てる。エフドは、モアブ王に貢ぎ物を献上する機会を利用して、準備しておいた剣を巧みに持ち込み、モアブの王エグロンを暗殺、宮殿からの逃亡に成功する。彼の角笛による合図で、イスラエルはヨルダン川西岸を奪い返し、そこにいたすべてのモアブ人を殺害、イスラエルの人々は80年にわたって平穏な生活を送ることができた。

本物語の文学的な構成は、以下のように図式的に纏めることができる。

12	民の悪行
13-14	モアブの王エグロンへの服属
15a	イスラエルの叫びとエフドの登場
15b-17	エグロンのもとに送られるエフド
18-26	エフドによるエグロン殺害
27-29	イスラエルとモアブの戦い
30	モアブの屈服と国の平穏

物語は、12節冒頭の「イスラエルの子らは再び、ヤハウエの目に悪を行った」という表現で始まる。これは、「前の預言者」をひとつの一貫した著作にまとめ上げた「申命記史家」に特徴的な定式表現であり³¹⁾、新たな物語を始めるための導入句になっている。ほぼ同じ表現が12節内でもう一度繰り返され

ており、2回目の表現は、イスラエルの敵としてモアブ王エグロンが登場する契機として機能している。

この民の悪行を受けて、13-14節では、イスラエルがモアブの王エグロンに服属したことが述べられる。この18年に及ぶ服属は、「仕える」(בד/ʿbd) という動詞によって表現されている(14節)。これと同じ構文は、『士師記』3章8節に見られ、両箇所はいずれも「申命記史家」の手によるものと見て差し支えないだろう。15節aのイスラエルの子らの「叫び」と、それによる救助者エフドの登場もまた、「申命記史家」に典型的な図式ならびに表現である³²⁾。

15b-17節には、イスラエルの子らによってエグロンのもとに送られたエフドが、持参した貢ぎ物を差し出す様子が描かれる。この段落中、16節では、「左利き」というエフドの身体的な特徴が述べられると共に、エグロン王を暗殺するために彼が行っておいた下準備(両刃の剣の製作)の様子が、時間軸を遡る形で語られている。

18節と27節は、いずれも物語の新しい段落の導入を示すוַיְהִי/way^h「～のことであり」という表現によって始まっており³³⁾、この区切りを目安として、18-26節と27-30節という2つの段落に分かれる³⁴⁾。まず18-26節では、エフドが単独でエグロンの宮殿に赴き、王の殺害だけでなく、現場の混乱に乗じて宮殿からの逃亡にも成功したことが語られる。この段落では、「すると見よ」(וַיִּבֶן/w^e-hinnēh) という表現が、24-25節の中で3度にわたって繰り返されており、これによって殺害された王が発見されるまでの一連の経緯が劇的に描き出されている。

続く27-30節では、エフド指揮の下、イスラエルがモアブを撃退する。13節ではモアブがイスラエルを「撃つ」(נכה/nkh hif.) が、29節ではその逆にイスラエルがモアブを「撃つ」(נכה/nkh hif.) のである。エフドの物語

は、30節aのモアブの屈服と30節bの「この地は80年にわたって平穏であった」との報告をもって幕が閉じられる。この30節に見られる敵の屈服ならびに国の平穏は、『士師記』に繰り返し見られる「申命記史家」に特徴的な定式である³⁵⁾。

本物語の中では、「手」(יָד/yād) の語が全体を貫く鍵語の1つとして効果的に用いられ、文学的なまとまりを生み出すものとして機能している³⁶⁾。イスラエルの子らは、右の「手」が遮られた人エフドの「手」に貢ぎ物を携えさせてエグロンのもとに「送る」(שלח/slḥ, 15節)。そのエフドは、エグロンと2人きりの状況の下、彼の左「手」を「伸ばして」(שלח/slḥ), 剣を取り、それをエグロンの腹に刺して殺害する(21節)。その後のイスラエルとモアブとの戦いの末、モアブはイスラエルの「手」の下に屈服することになるのである(30節)。

本物語では更に、ある1つの単語を別の文脈で用いる言葉遊びもいくつか見られる。エフドは、21節では剣をエグロンの腹に「刺し」(תקע/tq^ʿ), 27節では角笛を「吹き鳴らす」(תקע/tq^ʿ)。22節ではエグロンの脂肪が刃の後ろを「塞ぎ」(סגר/sgr), 23節ではエフドが階上の部屋の扉を「塞ぐ」(סגר/sgr)。これらの特定の言葉の繰り返しによって、本物語の各段落には相関性もたらされている。

その一方で、12-15*節、27-30節の枠部分と、15*-26節の物語部分の間には、記述の特徴に明らかな相違が見て取れる。枠部分では全イスラエルが描写の対象となっているのに対し、物語部分ではエフド個人の行動に焦点が当てられている。それに呼応して、枠部分では出来事が神学的に考えられているのに対し、物語部分には神学的な表現・定式は見られない。物語部分にイスラエルの神ヤハウェは登場せず、超自然的な奇跡行為もない。また枠部分では記述に具体性を欠くのに対し、物語部分では具象的で肉体性に富んだ詳

細な表現に満ちている。「全イスラエル」の一致団結は、27-29節のモアブとの戦いの場面には見られるが、物語部分では、エフドによるエグロン王殺害が最高潮になっており、エフドという1人の人物を英雄として描くことに主眼が置かれている。

以上のことを総括するに、『士師記』3章12-30節のテキストは、次の3つの段階を経て現在の形に至ったものと思われる³⁷⁾。最古の部分が、15*-26節である。これは元来、ベニヤミン族の古い独立した物語伝承で、エフドという民族の英雄が、敵のモアブ王の宮殿に単身で入り込んで王を殺害することに成功する。「小さい者」が「大きい者」を巧みな知恵を用いて打ち破ったことを伝える話である。

第2の段階は、12-15*節、27-30節の枠部分の内、「申命記史家」以前の編集の手によると思われる13.27-29節である。これらの節が加わることで、物語は「ヤハウエの戦い」として、ヤハウエの指揮の下、イスラエルがモアブの軛から解放されたことを語る話へと変化した。

そして最後に、「申命記史家」に特徴的な表現ならびに定式によって構成された12.14-15*.30節である。この「申命記史家」による編集は、物語を大きく枠付け、それ以外の「士師」の話の一つに位置付けている。

これらの内、本稿において注目するのは、15*-26節にその痕跡を残す、ベニヤミン族の古い独立した物語伝承の部分である。エフドはどのようにしてエグロン王を殺害した部屋から出て「密室」を作り、混乱に乗じて宮殿から逃れることができたのか、これが物語の中に仕込まれた「謎」である。

4. 「密室」殺人の様相

a. 登場人物

15*-26節の物語に登場する人物たちを整

理してみよう。まずは、殺害された人物、モアブ王の「エグロン」(עֲגֹלֹן/‘æglôn) である。エグロンは、『ヨシュア記』において、ユダ丘陵地帯にある地名としての用例があるものの³⁸⁾、人名としては、エフド物語のみに登場する³⁹⁾。עֲגֹלֹן/‘æglônの語は、עֲגֵל/‘ægæl「雄牛」に語尾-onが付いたものである⁴⁰⁾。עֲגֵל/‘ægælの語は、旧約聖書中、犠牲獣を表す際にも用いられている(レビ9:2-3.8)。エグロンは、17節では、「非常に太った」人であったと紹介されている。そのエグロンが剣によって命を落としたことは、よく肥えた「雄牛」が犠牲として屠られる様と意図的に重ね合わさられている⁴¹⁾。

次に、そのエグロン殺害を実行した人物の「エフド」(אֶחָד/‘ehûd) である。אֶחָד/‘ehûdの語義については諸説ある。אֶחָד/‘ehûd「偉大さはどこに」の音価が一部変化したもの、あるいはאֶבְיָהוּד/‘abîhûd「わが父は偉大なり」の短縮された形などの推測がなされている⁴²⁾。エフドの用例は、旧約聖書中、『歴代誌上』7章10節にベニヤミン族の1人としてその名が挙げられている以外は、本物語に集中する⁴³⁾。

エフドは、ベニヤミン人ゲラの子で、「左利き」の人であったといわれる。「左利き」は、字義通りには、「彼の右の手が遮られた」(אֶתֶר/‘ittēr) となっている。これと同じ表現は、『士師記』20章16節にも見られ、そこではギブアの住民からのえり抜きの兵士700人が「左利き」で、「皆髪の毛一筋を狙って石を投げても、外さなかった」といわれる。エフドが「左利き」とされるのは、それに伴って、刀の帯びる場所が一般的な兵士とは逆であったという、物語のその後の展開において、重要な役割を果たす事項である。ここでの「遮られた」という表現は従って、彼の身体的な欠陥を表そうとしたものであるとは考え難い⁴⁴⁾。

彼の「左利き」としての特性は、準備して

おいた両刃の剣を衣の下に隠してエグロンの宮殿に持ち込む際、右利きの人とは逆の右腿に装備していたことで、持ち物検査を免れたことが暗示される。彼の出身である「ベニヤミン」(בְּנֵימִן/bēn hay'mīnī)は、字義通りには「右の子」を意味する。ここには、「左利き」の人が「右の子」の一員であったとの言葉遊びが見て取れる。

物語の登場人物としては更に、エグロン王殺害の第一発見者となるエグロンの家臣たちがいる。彼らは、19節で「彼のそばに立っていたすべての者たち」といわれ、24節では「彼の家臣たち」と表現されている。

以上の3者が、エグロン殺害の現場に居合わせた人々である。物語には更に、エフドと共にエグロンの宮殿へと赴いた、貢ぎ物を運搬していた者たちが登場する(18節)。「民」(עַם/'am)と呼ばれる彼らは、貢ぎ物を差し出した後、エフドから送り出されて宮殿を後にしている。エグロン殺害時には、彼らは遠く離れた場所にいたことが前提にされているため、エグロン王の殺害には関与していない。

b. 現場

次に、殺害の現場となったエグロンの宮殿の構造を確認しよう。物語の展開上、その名が挙げられている具体的な部屋としては、まず「階上の部屋」(לְיָיָה/līyyāh)がある(20.23.24.25節)。この部屋は、エグロン王が殺害、発見された現場である。לְיָיָה/līyyāhの語は、語根לָחַץ/lh「上る」に由来し、家屋の平らな屋根の上に設けられた部屋を指す。

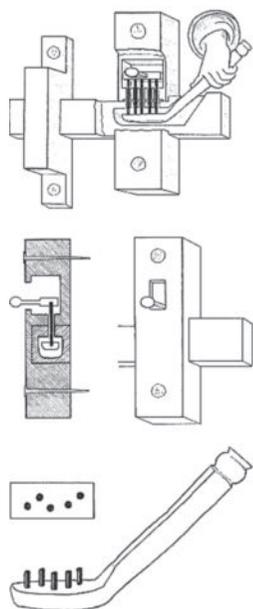
旧約聖書における「階上の部屋」の用例としては、個人宅(王上17:19.23)の他、エルサレム(王下23:12, イザ38:8)やサマリアの宮殿にも備わっていたことが窺い知れる(王下1:2)。エルサレム神殿にも、この部屋の存在が知られる(代上28:11, 代下3:9)。イスラエルの王アハズヤが転落して怪我を負ったのはこの部屋からであった(王下1:2)。またシュ

ネムの女が、預言者エリシャのために自宅の階上に壁で囲んだ部屋を作り、そこに彼が滞在できるようにしたといわれる(王下4:10)⁴⁵⁾。

20節からは、この部屋にはエグロン王が座するための「椅子」(כִּסֵּא/kissē')があったことが分かる。更に、23.24.25節では、「階上の部屋」に「扉」(דַּלְעַת/dal'et)の語が付随しており、この部屋は、隣り合う部屋と扉で仕切られていたことが前提にされている。23.24節には更に、語根לָחַץ/n'「門をかける」と結び付けられており、扉は門をして閉じることができる構造だった(サム下13:17-18, 雅4:12参照)。

この門を「階上の部屋」の外側から外し、扉を開けるには、「鍵」が必要だったようである(25節)。「鍵」を意味するמַפְתֵּחַ/map-tē'hは、語根פָּתַח/ptḥ「開ける」に由来する語で、旧約聖書中の用例は他に、『イザヤ書』22章22節のみである(なお、代上9:27, シラ42:6も参照)。本物語における錠前としてしばしば想定されるのが、「エジプト錠」と呼ばれるタンブラー錠である⁴⁶⁾。その構造は、鍵、ピン、門からなる。扉を内側から閉じるために横に渡した木の棒である門には、数個の穴が開けられており、門をずらしてかけると、穴にピンが下りて動かなくなる仕組みである。鍵は木の棒で、先にピンがついた大きな歯ブラシのような形状をしており、これを扉の穴から門のピンの真下まで差し込んで押し上げると、門にささっていたピンが持ち上がり、門をずらして外せるようになるのである(図表2参照)。

20節では、「階上の部屋」には、「涼み」(מִקְרָה/m'qērāh)の語が結び付いている(24節も参照)。この語は、語根קָרַר/qrr「涼しくする」(エレ6:7参照)に由来すると思われる⁴⁷⁾。מִקְרָה/m'qērāhをמִקְרָה/m'qārāhと読み換えて、上階部分の床や天井に用いられた木製の「梁」を意味すると捉える意見もある⁴⁸⁾。



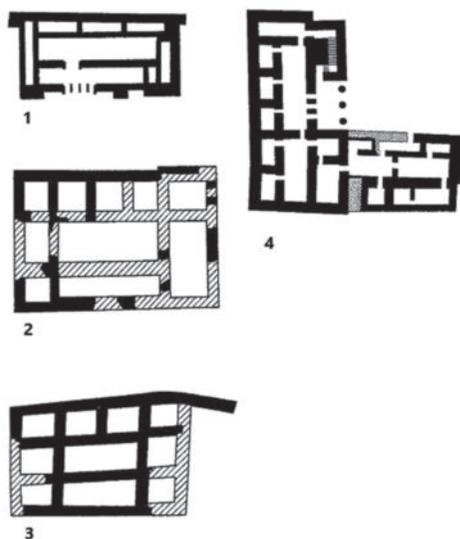
図表2 古代の鍵の再構成

「階上の部屋」以外にその名が挙げられている部屋が、23節の $\text{מִסְדָּרוֹן} / \text{misd}^{\circ}\text{r}^{\circ}\text{n}^*$ である(冠詞と、方向を表すヘー [He locale] が付く)。これは、旧約聖書中、本箇所のみに見られる語 (hapax legomenon) で、その厳密な意味の確定が難しい。おそらくは、「並べる」を基本的な意味を持つ語根 $\text{סדר} / \text{sdr}$ からの派生語で⁴⁹⁾、柱が並んだ「玄関」ないし「柱廊」を表しているものと思われる⁵⁰⁾。

エグロンの宮殿は、上記の「階上の部屋」と「柱廊」という2つの部屋以外に、その名が挙げられていない広間を備えていたと推測される。19-20節において、2度にわたる場面の転換が前提にされているからである。この広間は、19節でエグロン王とその家臣たちがおり、エフドが王に話しかけた場所であり、また24節でエグロンの家臣たちが入ってきて、「階上の部屋」の扉に門がされているのを確認し、しばらく待機していた場所である。

これらの部屋からなるエグロンの宮殿として参考になるとと思われるのが、「ビト・ヒラニ」

(*bīt hīlani*) 式と呼ばれる宮殿の構造である⁵¹⁾。この形式の宮殿の出土例としては、テル・ハラフ (Tel Halaf), テル・タヤナト (Tel Tayanat), エリコ (Jericho), メギド (Megiddo) の宮殿6000などが知られる(図表3参照)。

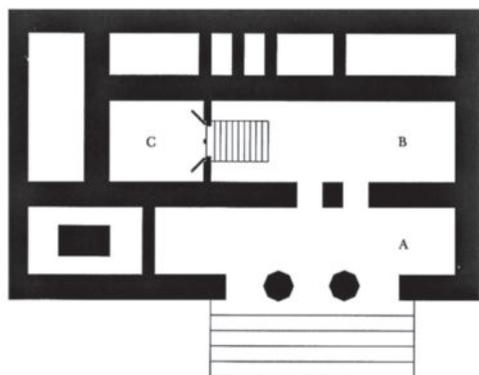


1. テル・ハラフ
2. メギド (宮殿6000)
3. エリコ
4. テル・タヤナト

図表3 「ビト・ヒラニ」式宮殿の出土例

鉄器時代の北シリアの宮殿に共通する独特な型を持つ「ビト・ヒラニ」式の建造物は、柱のある玄関部分、そして中央には大きな広間があり、これを取り囲むような形で小さな部屋が配されているのが特徴である。

以上の議論を踏まえると、エグロン王の宮殿は、玄関部分の「柱廊」、王座を擁する「階上の部屋」、そしてこれらの中央に広間を備えていた(図表4参照)。「階上の部屋」と広間は隣り合っており、施錠可能な扉によって仕切られていた。また、広間から「階上の部屋」へと上るために、階段が据えられていたものと思われる。



- A 柱廊
- B 広間
- C 階上の部屋

図表4 エグロンの宮殿の再構成

c. 行動

以上の前提を踏まえて、登場人物たちの一連の動きを追ってみよう。エフドはまず、貢ぎ物を運搬してきた者たちと共に、エグロンの宮殿に入る（17節）。その際、左利きのエフドは、剣を一般の右利きの人とは逆の右腿に装着し、衣の下に隠していたため、明言はされていないものの、入館時に行われた手荷物検査をすり抜けて、剣を宮殿内に持ち込めたことが前提にされている。彼はエグロンに貢ぎ物を渡すと、随行の民と共に1度宮殿を後にする（18節）。エフドはその後、ギルガル近郊のベシリムから1人引き返し、再びエグロンのもとにやって来る（19節a）。

エグロンの宮殿に姿を現したエフドは、王に言葉をかけ、エグロンの家臣たちを退去させる（19節b）。3者はこの時、宮殿の中央にある広間にいたものと思われる。20-22節では、舞台が「階上の部屋」へと移る。そこには椅子があり、エグロンが椅子に座っている状況の下、エフドが入室する。エグロンは「1人きりだった」（20節）という情報によって、そこにエフドの助けとなるような第3の人物は存在しなかったことが強調されている。この機会を利用して、エフドは隠してい

た剣をエグロンの腹に突き立てて殺害する（21節）。22節の「脂肪が刃の後ろを塞いだ」という表現からは、エフドがエグロンを刺した際、返り血を浴びることがなく、その後エグロンの家臣たちに何ら不信を抱かせなかったことが暗示されているのかもしれない⁵²⁾。

エフドが王と2人きりの状況を作るために発した19節の言葉と、王を立ち上がらせて近寄らせるために発した20節の言葉には、明らかな共通性がある。

「私には、あなたに、内密の言葉があります」（19節）

「私には、あなたに、神の言葉があります」（20節）

このようによく似た表現を用いることによって、それらが発せられる度にエフドとエグロンの空間的な距離が徐々に縮まってゆく様が、実に生き生きと描写されている。

23節には、主語として「エフド」が明言され、彼が殺害現場の「階上の部屋」を立ち去った様子が語られている。彼は最終的に、「柱廊」に「出てきた」(נִשְׁׁ/יִשְׁ')といわれる。

24節には再び、エフドが「出てきた」(נִשְׁׁ/יִשְׁ')とある。それに続いて、彼の行動と対比される形で、エグロンの家臣たちが「入ってきた」(בָּו/בַּו')といわれている。このエフドとエグロンの家臣たちの動きを示す表現は、19-20節の場合と逆になっている。

19-20節：

家臣たち 「広間」から「出ていった」
(נִשְׁׁ/יִשְׁ')

エフド 「階上の部屋」に「入った」
(בָּו/בַּו')

23-24節：

エフド 「柱廊」へと「出てきた」(נִשְׁׁ/יִשְׁ')

家臣たち「広間」に「入ってきた」(אִבּוֹ/
bw')

20節でエフドが「入った」のは、「階上の部屋」であり、23,24節でエフドが「出てきた」のは「柱廊」であった。19節でエグロンの家臣たちが「出ていき」、また24節で「入ってきた」のは、いずれも「階上の部屋」と隣り合う「広間」であったと推測される。そのように想定すると、エフドが「階上の部屋」の扉を閉め、門をする工程は、エグロンの家臣たちから目撃されることなく実行されたと考えられる。また「広間」からは、「階上の部屋」の扉の状態を見ることができたのであろう。入ってきたエグロンの家臣たちは、「階上の部屋」の扉が閉まって門がされていることを確認すると、王は用を足していると考えた⁵³⁾。「階上の部屋」には、トイレないしはトイレ用の桶が据えられていたものと思われる⁵⁴⁾。ところが、長時間経過しても王が出てこないことから、鍵を取って扉を開けると、自分たちの長が殺害されて倒れているのを発見するのである(25節)。エフドは混乱に乗じて、宮殿を脱出することに成功する(26節)。

この文脈で解釈が分かれるのは、エグロン殺害後にエフドがとった行動について語る23節である。エフドは、「彼の後ろで」(בְּאַחֶי/ ba'adô) 扉を塞ぎ、門をしたといわれる。この「彼」が、エフドを指すのか、あるいはエグロンを指すのかによって、この場面でのエフドの行動とその後の展開の理解は大きく異なる。

「彼」をエフドとした場合、エフドは「階上の部屋」を出た後で、「階上の部屋」の外側から扉の門をしたことになる。外側から門をすることができる構造になっていたのならば、エグロンの家臣たちはなぜ門がしてあるのを見ただけで、「階上の部屋」の中には王が1人で生きてると判断したのだろうか。

「階上の部屋」の外側から門をすることが容易にできない構造だったとすれば、エフドが「階上の部屋」を「密室」にした仕掛けは詳らかではない。

「彼」をエグロンとした場合、エフドは「階上の部屋」の扉を内側から閉めて門をした後、何らかの方法で別の部屋へと移ったことになる。その際に問題となるのは、「密室」となった「階上の部屋」からどのように脱出し、しかもその後エグロンの家臣たちに怪しまれずにいたのかという点である。こちらの見解をとるB. ハルパーン (Halpern) は、先にわれわれが「柱廊」と解した23節的וִּיִּמְצֵא/
misd'rôn*という語を、アラビア語の*sadira*「眩む」、「迷う」との関連から、「隠された場所」と捉え、「階上の部屋」の下にあって、普段は人が出入りするところのない空間と見なす⁵⁵⁾。エフドは、「階上の部屋」を内側から「密室」にした後、部屋の中に備えられたトイレを通過して脱出し、この「隠された部屋」へと出てきたのだと推理する。この解釈は、しかし、וִּיִּמְצֵא/
misd'rôn*という、旧約聖書の中で本箇所にはしか現れず、厳密な意味の確定が困難な語にすべてがかかっている。

いずれにせよ、物語伝承の語り手がこの文脈で示そうとしているのは、エグロン王を殺害したエフドが、巧みな知恵を用いて「階上の部屋」から退室し、「階上の部屋」を「密室」とするのに成功したということである。「階上の部屋」に門がされているのを確認したエグロンの家臣たちに、エグロンがまだ生きてその部屋の中に1人でいると信じ込ませ、殺害された王を発見するまでに多くの時間を要させることになったのである。エフドはいかにしてこの「密室」を作り出したのか。物語にたたみ込まれたこの「謎」の真相を解き明かすことのできる名探偵の登場が待たれる。

おわりに

『士師記』3章12-30節のテキストは、エフドの活躍について語るベニヤミン族の古い伝承物語（15*-26節）を中核に持つ。そこで強調されているのは、イスラエルの神ヤハウエの力でも、超自然的な奇跡行為でもなく、英雄エフドの知恵と勇気に満ちた行動である。彼が敵対するモアブの王の宮殿に単独で入り、エグロンを殺害した後、現場を「密室」にすることによって王の家臣たちを欺いた過程は、まさに「ミステリ」と呼ぶに相応しい様相を呈している。

出典

- 図表1 『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年、770頁。
 図表2 E. A. Knauf, *Richter* (ZBK), Zürich 2016, 62, Abb. 4.
 図表3 B. Halpern, *The First Historian: The Hebrew Bible and History*, San Francisco 1988, 48.
 図表4 B. Halpern, *The Assassination of Eglon: The First Locked-Room Murder Mystery*, BR 4 (1988), 37を元に作成。

注

- ¹⁾ 「ミステリ」とは何かという問題については、神代真砂実『ミステリの深層—名探偵の思考・神学の思考』教文館、2008年、24ff頁；廣野由美子『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む—』岩波新書、2009年、2ff頁；堀啓子『日本ミステリー小説史—黒岩涙香から松本清張まで』中公新書、2014年、3ff頁など参照。
²⁾ μυστήριονの語義については、H. Krömer, Art. μυστήριον, in: *EWNT* II (1992³), 1098ff [『ギリシア語新約聖書釈義事典II』教文館、1994年、513ff頁] 参照。
³⁾ *The Oxford English Dictionary*, 2nd. Ed., Vol. 10, Oxford 1989, 173ff参照。
⁴⁾ 小池滋「探偵小説」、『集英社 世界文学大事典5』集英社、1997年、507頁参照。
⁵⁾ 似たような構成を持ち、本作よりも前に発表されていたイギリスの作家チャールズ・ディケンズによる『バーナビー・ラッジ』を世界

初と見なす向きもある。堀啓子『日本ミステリー小説史』15ff頁参照。

- ⁶⁾ 『アメリカン・マガジン』(*American Magazine*) 誌の1928年9月号に掲載、1936年に刊行された短編集 *Philo Vance Investigates* に収録。邦訳は、ヴァン・ダイン『ウインター殺人事件』井上勇訳、創元推理文庫、1962年。
⁷⁾ 1928年に、*The Best of Detective Stories of the Year 1928* にて発表。邦訳は、ロナルド・ノックス編『探偵小説十戒—幻の探偵小説コレクション』宇野利泰／深町真理子訳、晶文社、1989年。
⁸⁾ 神代『ミステリの深層』、39f頁；堀『日本ミステリー小説史』、4f頁参照。
⁹⁾ 『聖書外典偽典第2巻 旧約外典II』教文館、1977年、273ff頁参照。
¹⁰⁾ 『旧約外典II』、276f頁参照。
¹¹⁾ E. Würthwein, *Das erste Buch der Könige. Kapitel 1-16* (ATD 11,1), Göttingen 1985², 35ff [E. ウェルトワイン『ATD旧約聖書註解8 列王記〈上〉』頓所正／山吉智久訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会、2013年、79ff頁]；山我哲雄『VTJ旧約聖書注解 列王記上1～11章』、日本基督教団出版局、2019年、136ff頁参照。
¹²⁾ モアブ人については、E. Gaß, *Die Moabiter. Geschichte und Kultur eines ostjordanischen Volkes im 1. Jahrtausend v. Chr.* (ADPV 38), Wiesbaden 2009参照。
¹³⁾ アンモン人については、U. Hübner, *Die Ammoniter. Untersuchungen zur Geschichte, Kultur und Religion eines transjordanischen Volkes im 1. Jahrtausend v. Chr.* (ADPV 16), Wiesbaden 1992を参照。
¹⁴⁾ E. Gaß, *Die Ortsnamen des Richterbooks in historischer und redaktioneller Perspektive* (ADPV 35), Wiesbaden 2005, 36f参照。
¹⁵⁾ M. Noth, *Die israelitischen Personennamen im Rahmen der gemeinsemitischen Namengebung*, Stuttgart 1928, 148f参照。
¹⁶⁾ Ges¹⁸, 1040; J. Berman, 'The 'Sword of Mouths'' (Jud. III 16; Ps. CXLIX 6; Prov. V 4): A Metaphor and Its Ancient Near Eastern Context, *VT* 52 (2002), 291ff参照。
¹⁷⁾ 秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書 士師記』青土社、2019年、45頁参照。
¹⁸⁾ H. Weippert, Art. Dolch und Schwert, in: *BRL*², 57ff参照。
¹⁹⁾ Gaß, *Die Ortsnamen*, 185ff参照。

- ²⁰⁾ 秦『士師記』, 44頁参照。
- ²¹⁾ 秦『士師記』, 44頁参照。
- ²²⁾ B. Lindars, *Judges 1-5. A New Translation and Commentary*, Edinburgh 1995, 127; A. Scherer, *Überlieferungen von Religion und Krieg. Exegetische und religionsgeschichtliche Untersuchungen zu Richter 3-8 und verwandten Texten* (WMANT 105), Neukirchen-Vluyn 2005, 38など参照。
- ²³⁾ J. A. Soggin, 'Ehud und 'Eglon: Bemerkungen zu Richter III 11b-31, VT 29 (1989), 97; W. Groß, *Richter* (HThK.AT), Freiburg u.a. 2009, 226など参照。
- ²⁴⁾ HAL 920参照。但し, AHw 832bでは, アッカド語 *paraštinnu*, ヒッタイト語 *parašdu* 「つぼみ?」の同根語と理解。
- ²⁵⁾ 「小窓」(フランシスコ会訳), 「窓」(新改訳, 聖書協会共同訳), 「窓穴」(岩波訳)。
- ²⁶⁾ 「汚物」(新共同訳), J. Gray, *Joshua, Judges and Ruth* (New Century Bible), Grand Rapids 1967, 264など参照。
- ²⁷⁾ M. Barré, The Meaning of *pršdn* in Judges III 22, VT 41 (1991), 1ff.
- ²⁸⁾ これまでに挙げられてきた候補として, ワデイ・エシュ・シャイール (*Wādī eš-Ša'ir*) とトゥール・ウム・ツイーラ (*Tūr Umm Šīra*) がある。Gaß, *Die Ortsnamen*, 220ff参照。
- ²⁹⁾ 秦『士師記』, 48頁参照。
- ³⁰⁾ オトニエルについては, 山吉智久「最初の『士師』オトニエル」, 『北星論集』59(1), 2019年, 35ff頁参照。
- ³¹⁾ この定式表現については, 山吉智久「『彼らはヤハウエの目に悪を行った』—士師記の『循環的定式』—」, 『北星論集』58(1), 2018年, 21ff頁参照。
- ³²⁾ 山吉「循環的定式」, 30頁参照。
- ³³⁾ GK²⁸ §111f参照。
- ³⁴⁾ Groß, HThK.AT, 227参照。
- ³⁵⁾ 山吉「循環的定式」, 30頁参照。
- ³⁶⁾ Groß, HThK.AT, 232参照。
- ³⁷⁾ Groß, HThK.AT, 230参照。
- ³⁸⁾ ヨシュ 10:3.5.23.34.36.37, 12:12, 15:39。
- ³⁹⁾ 士3:12.14.15.17。
- ⁴⁰⁾ J. J. Stamm, Zum Ursprung des Namens der Ammoniter, *ArchOr* 17 (1949), 379ff参照。
- ⁴¹⁾ Lindars, *Judges*, 138; Groß, HThK.AT, 233など参照。
- ⁴²⁾ Noth, *Personennamen*, 146. 235; J. J. Stamm, *Beiträge zur hebräischen und altorientalischen Namenkunde* (OBO 30), Freiburg/Göttingen 1980, 64.69参照。
- ⁴³⁾ 士3:15.16.20.21.23.26, 4:1。
- ⁴⁴⁾ Groß, HThK.AT, 226f参照。
- ⁴⁵⁾ イエスによる最後の晩餐もまた, こうした階上の広間で催されたと言われる(マコ14:15参照)。
- ⁴⁶⁾ P. J. King / L. E. Stager, *Life in Biblical Israel*, Louisville/London 2001, 32f; K. Galling / H. Rösel, Art. Tür, in: *BRL*², 349; T. Staubli, Art. Schlüssel, in: *NBL* III, 487f参照。
- ⁴⁷⁾ なお, この語を語根 *qrh* 「出会う」(創42:29, 44:29, コヘ2:14.15, 9:11など参照)からの派生語と捉え, 「便所」の婉曲表現とする意見もある。T. A. Jull, *qrh* in Judges 3: A Scatological Reading, *JOT* 81 (1998), 68参照。
- ⁴⁸⁾ B. Halpern, *The First Historian: The Hebrew Bible and History*, San Francisco 1988, 45f; —, The Assassination of Eglon: The First Locked-Room Murder Mystery, *BR* 4 (1988), 38参照。
- ⁴⁹⁾ HAL 702参照。アッカド語の *sadāru* 「並べる」(AHw 1000b)も参照。
- ⁵⁰⁾ 七十人訳では, προπότας 「ポーチ」。秦『士師記』, 46頁参照。
- ⁵¹⁾ A. Kuschke, Art., Palast, in: *BRL*², 242ff参照。
- ⁵²⁾ Groß, HThK.AT, 236参照。
- ⁵³⁾ 「足を覆う」が「用を足す」の婉曲表現であることについては, S. Schorch, *Euphemismen in der Hebräischen Bibel*, Wiesbaden 2000, 173参照。
- ⁵⁴⁾ U. Hübner, Mord auf dem Abort? Überlegungen zu Humor, Gewaltdarstellung und Realienkunde in Ri 3,12-30, *BN* 40 (1987), 140参照。
- ⁵⁵⁾ Halpern, *The First Historian*, 58; —, The Assassination of Eglon, 40参照。また, このハルバーンの説を紹介している越後屋朗「エフド物語(士師記3章12-30節)解釈—エフドによるエグロン殺害状況についての一考察—」, 『基督教研究』70, 2008年, 17ff頁も参照。